景観まちづくりフォーラム in うらそえ 2009

～てだこ市民によるウラオソイ風景づくり～

主催：浦添市／財団法人 自治総合センター

宝くじは
豊かさ築く
チカラ持ち。
宝くじは、広く社会に役立てられています。

主催者あいさつ

浦添市長
儀間　光男

「景観まちづくりフォーラム inうらそえ2009」を開催するにあたり、一言ご挨拶を申し上げます。

ご来場の皆様方には、本日は市内外からお集まりをいただき、誠にありがとうございます。多くの方々の参加のもとフォーラムを開催することができましたこと、主催者として大変喜びとしているところであります。

出演者の皆様をはじめ、フォーラム開催にご尽力をいただきました関係各位に対し、深く感謝を申し上げます。

フォーラムは、市民の景観まちづくりに対する意識の高揚を図ることなどを目的に実施するものであります。

ご承知のとおり、本市は平成18年に景観行政団体となり、平成19年に浦添市景観まちづくり条例を制定をさせていただきました。重点地区であります仲間地区をはじめ、市内全域の良好な景観形成を積極的に推進しているところでございます。言うまでもなく景観まちづくりの一層の推進には、市民の皆様方のご理解、ご協力は不可欠であります。今後とも皆様方のお力添えを賜りますように、改めてここでお願いを申し上げたいと存じます。

さて、本日の基調講演の講師であります政策研究大学院大学教授の篠原修先生におかれましては、快くその講師をお引き受けいただき、また、このフォーラムのために東京からわざわざ沖縄、そして浦添にお越しいただきましたことに、心から感謝を申し上げたいと思います。

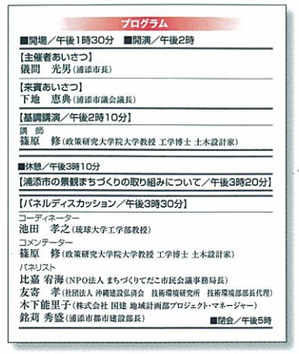
景観デザイン等の分野において、日本の第一線で活躍されております篠原先生にお越しをいただいたことは、誠に意義深く、本市の景観行政の一層の推進に大きく寄与するものであると期待を膨らませているところであります。

また、パネルディスカッションに参加していただく琉球大学工学部教授の池田孝之先生には、日ごろから、長年お世話をいただいている先生でありまして、心から謝意を申し上げます。

また同時に、ＮＰＯ法人まちづくりてだこ市民会議事務局長の比嘉宥海先生、さらには社団法人沖縄弘済会技術環境研究所技術環境部長代理の友寄孝先生、さらには株式会社国建地域計画部プロジェクトマネージャーの木下能里子先生におかれましては、日ごろから地域に根づいたまちづくり活動を精力的に行っておりますことに対し、深く感謝を申し上げる次第であります。

このたびのパネルディスカッションが、市民とともに景観まちづくりについて考え、私が日ごろ申し上げている地域力を高める場になりますよう、ご期待を申し上げたいと存じます。

結びに、来賓の浦添市議会の仲里副議長さま、地権者の皆さんをはじめ、ご来場の皆さまのご健勝、ご活躍を祈念申し上げ、挨拶とさせていただきたいと存じます。



プログラム

■開場／午後1時30分　■開演／午後2時

【主催者あいさつ】
儀間　光男（浦添市長）

【来賓あいさつ】
下地　恵典（浦添市議会議長）

【基調講演／午後2時10分】
講　師
篠原　修（政策研究大学院大学教授 工学博士 土木設計家）

■休憩／午後3時10分

【浦添市の景観まちづくりの取り組みについて／午後3時20分】

【パネルディスカッション／午後3時30分】
コーディネーター
池田　孝之（琉球大学工学部教授）
コメンテーター
篠原　修（政策研究大学院大学教授 工学博士 土木設計家）
パネリスト
比嘉　宥海（NPO法人 まちづくりてだこ市民会議事務局長）
友寄　孝（社団法人 沖縄建設弘済会　技術環境研究所　技術環境部部長代理）
木下能里子（株式会社 国建 地域計画部プロジェクト・マネージャー）
銘苅　秀盛（浦添市都市建設部長）

■閉会／午後5時

景観まちづくりフォーラムinうらそえ2009

～でだこ市民によるウラオソイ風景づくり～

平成21年11月25日、浦添市てだこホール（小ホール）において「景観まちづくりフォーラム inうらそえ2009」を開催しました。

本市の景観行政は、昭和59年度の景観賞に始まり、昭和63年度に都市景観形成基本計画の策定、平成11年度には市民参加を促しかつ支援する表彰・助成制度の「まちづくりプラン賞」を制定し、市民が主体となったまちづくりに関する取組みを地域と共に実践しているところであります。「まちづくりプラン賞」は平成21年度までに9回実施され、受賞団体同士のネットワークも構築されてきました。

また、平成18年度に景観行政団体となり、平成20年には浦添市景観まちづくり計画の策定及び浦添市景観まちづくり条例を施行し、本年度からは本格的な景観法に基づくまちづくり行政に取り組んでいます。

今後は、沖縄都市モノレールの延長に伴う駅周辺開発、西海岸における道路整備などの大型公共プロジェクトが予定され、一方では浦添城跡の世界遺産追加登録に向けた復元・環境整備が進んでいることから、成熟都市浦添を目指した景観まちづくりの果たす役割がこれまで以上に重要となります。

今回の「景観まちづくりフォーラム inうらそえ2009」は、これらの状況を踏まえ、浦添の風景や景観について市民とともに見つめ・考え、市民・行政・専門家による地域力を活かした景観まちづくりをよりいっそう推進することを目的に実施しました。

CONTENS

主催者あいさつ …… 1
「まちづくりフォーラム inうらそえ2009」 …… 2
基調講演
『風景づくりにおいて大切なこと』 …… 3～11
景観行政の取り組みについて …… 12
パネルディスカッション …… 13～14
年　表 …… 15～18

篠原　修 氏
政策研究大学院大学教授
工学博士 土木設計家）

基調講演
『風景づくりにおいて大切なこと』

はじめまして、篠原と申します。

随分丁寧に紹介いただきましたけれども、実際のところよくわからなかったんじゃないかなと思いますのでちょっと補足しますと、紹介にありましたように、元々の出身は土木です。卒業したのは昭和43年といっても最近の若い人はわからないから、1968年です。土木でしたので、同級生は当時の国鉄に入ったり、建設省に入ったり運輸省（現：国交省）の港湾に入ったり、ゼネコンに入るという時代でした。

ちょっと私は変わった人間だったので、土木でしたが、卒業論文のときから景観というか風景のことをやっておりました。1968年ですから、もう40年ちょっと風景のことをやっておりまして、それが第一の専門です。それから1986年、昭和も終わりの頃に、ある人から「橋のデザインを手伝いませんか」と言われました。さっき紹介がありましたように、関東の一角に千葉なのですけれども松戸というあまり有名なところではないんですけれども、有名人が出ていたことでいうと、剣豪の千葉周作の出身地だそうです。そこに公園をつくることになって、その公園の中に橋をつくる。その橋があまりひどい橋だと公園の雰囲気が台無しになっちゃうので、手伝いませんかと言われて、それで橋のデザインを始めました。

最初は橋を随分やっておりましたけど、平成３年からは川もやり始めまして、それから次の平成４年からは、今甚だ世間で評判が悪いですけれども、ダムの仕事もやるようになりまして、最近10年はさっき部長さんから紹介ありましたように、建築家とか、いわゆるデザイナーですね。照明のデザインをやったり、ベンチのデザインをやったり、そういうデザイナーとか、都市計画の人と組んで駅前広場とかそういうことをやるようになって今日に至っています。

ですから、僕の専門は何かと言われると、そういうふうに言えば第２の専門がデザインですけど、建物以外は何でもやっているという感じですかね。そこの広場を何とかしろという、さっきの市長さんはちょっとプレッシャーですね。そういう経歴の持ち主です。

沖縄には何回かお邪魔したことがございますけど、後でスライドをお見せしますが、橋の仕事でまいりました。しかし、浦添に招いていただいたのは初めてなのできょう午前中いろいろ案内していただきまして、いろいろありましたけど、市役所の９階から見ると海がよく見えて、慶良間諸島もよく見えて、ああいいところだなと思いました。普段、皆さんは暮らしているからそう思わないかもしれませんけど、よそから来る人間にとっては非常にいいところだと思いました。

あと、びっくりしたのは、確かに東京とか横浜から遠いことは遠いですけど、東京よりも断然台湾のほうが近い。それから東のほうは、東京まで確か1,560㎞と出ていたと思いますけど、ああ、そうかフィリピンのマニラと同じぐらいなんだなと思って、ちょっとびっくりいたしました。そういう意味でいうと、これはほめ言葉ですけど、本土とは違う文化を持っていますよね。あとのパネルディスカッションで時間で申し上げたいと思いますけど、僕は、それが実にうらやましいなと思っております。

きょうの話は「風景づくりにおいて大切なこと」と題しましたが、１時間ぐらいですので大した話はできません。ただ、さっき言いましたように、風景の問題に関しては40年ぐらいやってきて、実際の橋とか街路とか広場とか駅とか、ものをデザインする仕事も20年ぐらいやってきましたので、やっぱりこういうところが大事なのではないかなというのは幾つか思っているところがありますので、そのお話をしようと思ってまいりました。

デザインとは

多様な要求と統合（まとめあげる）

すぐスライドに移りますが、その前にちょっとだけ申し上げます。

2004年に景観法ができまして、2005年から施行になりました。きょうも先ほど話しておりましたけれども、沖縄でも随分景観行政団体になる自治体が増えてきて大いに盛り上がってきているということで、それは誠によろしいことだと思いますけれども、なかなか難しいところもあります。

いろいろな難しいところがありますけれども、一番難しいなと思うのは、ちょっと大げさに言うと、明治維新以来日本がやってきたやり方で景観づくりができるかなというと、それがなかなか難しいのではないかと思います。日本人というのは物まねだとかいろいろ言われてますけれど、やっぱりそれはそれなりに優秀で…。

これちょっと後で考えていただきたいのですけど、明治維新というのは1868年ですが、明治維新になったときにヨーロッパ、アメリカの植民地になっていなかった国がアジアでは２つだけありまして、１つは日本です。あと１つはどこでしょうか。つまり、それだけ昔の言葉で言うと欧米列強の食い物にされていたわけですよね。それなので、ぼやぼやしていると植民地にされるなというのが明治政府の幹部の恐れだったと思います。

それで、早々と明治５年だったと思います。遣欧使節団というのをつくって、岩倉具視が団長になって、アメリカ、ヨーロッパ、最後はアジアを１年半ぐらい回って帰ってきた。これは木戸孝允も行ってますし、大久保利通も行ってます。政府の首脳陣半分が日本を留守にして、ヨーロッパ、アメリカに勉強に行ったわけです。そのくらい真剣だったということだと思います。その成果かどうかわかりませんけど、ともかくいろいろなヨーロッパ、アメリカのいいところを取り入れて日本を近代化しようというふうにやったわけです。

私が勤めている大学のほうでは、ドイツがモデルです。それから立憲君主制もドイツとイギリスの中間ぐらいですかね。それから海軍はイギリス。陸軍は最初フランスだったんですけど、途中からドイツがモデルになっている。いいところを取ってきて、一生懸命勉強して近代国家になったわけですよね。

ところが、このまちづくりというか、景観に関してそういうやり方がうまくいくかどうかというと、これはなかなか難しいと思います。

一番わかりやすい例を申し上げますと、2004年に景観法ができまして、施行になる前ですが、こういう法律ができたので景観先進都市に行って、そのまちを見て景観行政をやっている市役所の人と話しましょうということで、確か10日ぐらいだったと思いますけどイタリアに行きました。ローマを見たり、ボローニャを見たり、フィレンツェを見たり、ベネチアを見たりいろいろ回りました。行く前から薄々わかっていたんですけど、見て市役所に行って話すと、今、多分景観行政は各市の都市計画課が担当していると思いますけれども、文化財とか歴史をやっているのは都市計画課ではなくて教育委員会ではないかと思います。ボローニャだったと思いますけど、都市計画課の中の半分近くが史跡とか建築士とか歴史の人でした。何でですかと言ったら、景観行政のベースは古くからある建物とか、街路とか、広場だから、それの保存を考えなければ都市計画もできないし景観づくりもできない。

言うことはおわかりだと思いますけど、正確に言うと、近代工業化以前ですけどね。つまり、コンクリートとかガラスとか、鋼鉄、スチール、それが出てくる前につくったまちがベースになっているわけです。だから、道にしても石畳だし、建物にしても石だとか、レンガだとか、あと屋根は瓦だし。つまり、それがベースになっているので、いいものをいかにうまく守っていくかというのがベースになっているわけです。

ところが、一方、我が国の場合は、そういういいものが残っているかどうかというのを考えると、首里城は復元されましたけど、街並みでいいというふうに文化庁のほうで認定しているのは、重要伝統的建造物群という長ったらしい名前なんですけど、普通、伝建、伝建と言ってます。街並みが残っているところですね。それが国が選定している。つまり、一応国がお墨付きをつけて、これは江戸時代の街並みですとか、これは明治の街並みですとか。お城とは違います、まちです。認定しているところが幾つかあるかというと、確か今81か82だと思います。つまり、日本には47都道府県ありますから、１県に２つもない。多少私も沖縄のことは勉強しましたのでわかりますけど、特に沖縄は街並みとしては何も残ってないですね。竹富島くらいですか。あと、もう１つあると聞きましたけど。

つまり景観に関しては、ヨーロッパ、アメリカが先進国で、それを真似してやろうと思ってもベースが違う。つまり向こうはいいものが残っているから、それをベースにやっているわけですよね。日本の場合は街並みとしていいものが残ってないので、向こうの真似をしようと思ってもできないと思います。だから、日本が一番苦しくて、これからいいものをつくっていかなければいけないという状況にあるわけです。そこのところが大きく違うところです。

ですから、そういう関連で言いますと、景観行政団体になって景観計画をつくって、地区指定をしてコントロールするというのは、これはこれでいいわけですけど、コントロールするとか規制をするというのは、あんまりひどいものができないようにするということはできる。変な看板ができたり、赤だとか黄色だとかという派手な色遣いをするということを押さえることはできるけど、そのコントロールでいいものもつくれるかというと、それは無理だと思う。だから、いいものをつくるシステムを、あるいはいいものをつくれる人材を養成しないと、日本の場合はまずいというふうに思います。だから、そこが一番苦しいところですね。いいものをつくるシステムにするとか、いいものをつくる人材をと言いますけど、いいものをつくるシステムという話でいうと、きょう私は橋の話をしようと思って来ましたけど、前にもう10年近く前になりますけど、マーク・ミムラムといって一番最近のセーヌ川にかかる橋を設計した男なんですけど、彼に来てもらってシンポジウムをしました。一体全体フランスというのは、ちょっと目立つような、あるいはいい橋、大きい橋、都市にとって重要な橋、セーヌ川にとって重要な橋だったんですけど、ソルフェ

リーノという橋なんですけど、チュイルリー公園とオルセー美術館を結ぶ歩道橋です。「フランスは橋の設計はどうやっているんですか」と言ったら、僕はフランス語わからないから通訳の言うことを聞いたんですが、それは全部コンペです。入札で安いお金のところに設計してもらうなんてことはやっていない。全部競争です。それもヨーロッパですから、全部国際競争ですね。

そう言われてみれば、皆さん、エッフェルという人を知っていると思いますけど、エッフェル塔を設計した人です。あれはもともと橋のエンジニアなんですよ。橋をいっぱい架けてきた。あのコンペで勝ってエッフェル塔を設計して工事もやっております。だから、19世紀です、その時代から見てみれば、ああそうか、スペインのマドリッドという都市に行くと、当時は駅なんですけど、これはエッフェルを設計した鉄骨の駅なんです。だからポルトガルのポルトというところに行くと、やっぱりエッフェルが設計した鉄道橋が架かっている。

ハンガリーは行ったことないんですけど、ここの駅もそうだそうです。だから、向こうはいつも競争させてるわけです。優秀な人材を育てる。つまりデザイン力がないと、あるいは技術力がないと、設計を頼まない。そういう観点から見ると、日本はどうなっているかというと、なかなかそうなってない。これは本気でやるんだったらそういうシステムにしないといけない。

多少はそういうことになっていまして、ちょっと広島市とつき合っているので、時々、町では平和大橋ってあります、平和公園の脇に。あれの歩道橋の脇にまた、道路の歩道橋の脇に歩道橋をかけることになったんですけど、これもここは国際コンペでやりました。その後、太田川豊水路という海に近いところに橋があるんですけれども、これもコンペでやりました。いずれも外国からも参加してもらいました。何でかというと、僕は審査員をやっていたからですけど。そうやるとやっぱり、いい案が出てくるんです。それから人材のほうも育っていく、こうやって育てないとだめです。沖縄はそういうことないと思いますけど、時々はこういう世の中だから、地元の人にみんなやってもらうという話がすぐ出ますけど、それではやっぱりだめなんじゃないかな。

前置きはこのくらいにしまして、ただ前置きですけど、今後にとって前置きのほうが重要だったかもしれません。

きょうは、先ほど申しましたように、条例をつくったり計画をつくったりして、規制をする、コントロールするというだけでは、やっぱりいいものはできない。片一方でいいものをどうやってつくるかということを考えなければならない、何せ昔のいいものがあまり残ってないんですから。

それで、前に浦添市の方に話を聞きましたら、浦添は今の時期、海岸のほうに橋を架ける、モノレールも延伸する、そういう話を聞きましたので、それは大変だというのはおかしいですけど、それは重要だ。なぜかというと、そういう橋とかモノレールとかモノレールの駅だとか駅の周辺の広場とかいうのは、よっぽどのことがない限り、1回できればやっぱり50年、100年は使いますから、それは非常に重要に考えないといかん。というので、インフラのデザインで、先ほど言いましたようにいろんなことやってきましたけど、橋のデザインの話をちょっと紹介して、こんなふうに考えてやっていますと。これは私の考えですけど。ということでお話をしたいと思います。

橋のデザイン

•阿嘉大橋と古宇利大橋

最初に、実は沖縄県では2つだけ仕事をやっておりまして、もう随分前になるので、友寄さん、あれは何年ぐらい前でしたかね、阿嘉島へ行ったのは。もう10年近く前かな。8年ぐらいかな。何か縁がありまして、慶良間諸島の阿嘉島に橋を架けるんだと言われて、お手伝いに行きました。それは無事にできました。それから、そのちょっと後だったと思いますけど、古宇利島にも橋を架けました。これは私が今までやった橋の中で一番長いのですけど、1,960mの直線の橋です。この2つをご紹介します。（スライド）

案外、皆さんあまりに近いので行ったこともないんじゃないかと思いますけど。これが阿嘉大橋という橋です。阿嘉島と飛行場がある島を結んでいる。そのとき行きまして、盛んにダイビングやれと言われたんですけど、阿嘉島は世界的なダイビングスポットで有名だそうで、確かに海を見ていれば非常にきれいです。この橋は大野美代子さんという女性なんですけど、私よりずっと前から橋のデザインやっている女性で、皆さんが一番わかりやすいのは横浜ベイブリッジの斜張橋をやった女性です。彼女と一緒にやりました。こういう橋です。（スライド）

これは港のほうから見たところです。（スライド）

これは開通式のときの写真だったかな。ご覧になりましたように、コンクリートのアーチ橋です。これをやったときにびっくりしたのは、最初に見に行ったときも、それから開業式のときにも、那覇から船で行きました、1時間ぐらいですかね。だんだんだんだん近づいていきますと、非常に天気がよかったものですから、これで何となく、ちょっとわかるんじゃないでしょうか。もう少し遠くから見たときも、橋が緑色に見えるというかブルーに見えるというか、ちょっと何となくそんな感じありますよね。そういうふうに見える。あれおかしいな、確かコンクリートでやったはずだから、灰色に見えなければおかしいのに、何でこんな緑みたいな青みたいな橋に、そんな色に見えるんだろうと思ったら、あまりに海がきれいだから、太陽から水面に反射した光が橋に映って、ちょっと緑っぽく、青っぽく見える。（スライド）

それから、これは古宇利島に行く古宇利大橋です。05年と書いてあるから、4年前に、確か那覇におじゃましたときに、久しぶりで見に行った。（スライド）

こんなのは子供のあれで、楽しく。（スライド）

これもコンクリートの橋です。（スライド）

これは橋のたもとから見たところです。こんな長い橋をやったのは初めてです。（スライド）

こういう橋です。（スライド）

最初の案はちょっと違っていたのですけど、経費の削減の関係で全部同じピア、柱の形になっていますけど、きれいにできたと思います。（スライド）

どういう気持ちでやっているかというのを、ちょっと見せると、Aいい形をつくる、ものの形、空間の形と書いてありますが、これが普通に言うデザインです。今お見せしたように、ちょっと俗な言葉で言うと、かっこいい橋をつくりましょうね、きれいな橋をつくりましょうねということなんですけど。私がいつも考えているのは、Bのほうも一緒に考えているということです。つまり、良い風景をつくるということです。今の橋の話でいうと、理想的には橋の形もきれいだし、その橋も含める風景がすごくいいということで、そういう気持ちでいつもやっています。多分、一番最初の専門が景観とか風景だったからでしょう。ですから、いい橋をつくりたいんだけど、橋ばっかり目立ったらいかん。いかに風景としていいようなものをつくるか、ということをいつも考えています。（スライド）

これは僕の専門が土木だけじゃなくてもともと建築もそうだったはずです。建物をつくってその建物はなかなかいい建物だけど、周りの山とか周りの木とか一緒になって、風景がいいように映っている。これが1つです。風景づくりにあたって、これが1番です。だから場合によっては、自分がつくったものはほとんど目立たなくてもいいというふうに考えます。これが大事なことの第1点です。

インフラの要件

寿命と選択権

第2点目は、これを考えてください。どういうことかというと、縦軸には耐用年数が書いてあります。つまりものの寿命ですね。横軸は右のほうに公共性、公と書いてありますけど、これは公共性が高い。左に行くと公共性が低い。

寿命が長いか短いか、個人で使うかみんなで使うかと考えると、同じデザインでもいろんなデザインがあります。この区別をちゃんとしてないと、まずい。例えば、皆さんが今身に付けておられるシャツとか、パンツとかブレザーはどういうものかというと、耐用年数は短い。僕はケチですから結構着ていますけど、このブレザー10年は使わないでしょう。それで、だれが使うのかというと、個人的なものです。いくら親しい友人に対しても、いくらなんでも自分のシャツは貸さないでしょう。ということは、シャツとかブレザーとか、女性のブラウスとかは、ここ（ファッションデザイン）にあって、寿命は短くて個人が使う。

ということですから、とりたててこんなことは言いませんけれども、ファッションをデザインしているデザイナーはどう考えているかというと、あんまり頑丈につくる必要はないよね。だって、あんまり頑丈に作ったら高くなる。それから、個人が使うんだから、こういう系統のシャツとかブラウスが好きな人が買ってくれればいい。まさか、自分がデザインしたブレザーとかシャツを、100人が100人買うとは考えていない。だから逆に言うと、自分の好みを出してもいい。100人のうち1人が買ってもらえばＯＫ。もう1つ言うと、寿命が短いですから、ことし売れなければ困る。来年売れなくなってもしょうがない。いわゆる流行を追っかけても構わない。口に出しては言いませんけど、そう思ってデザインしているはずです。ですよね。

ところが、私の専門はここ（土木デザイン）で、建築家はもうちょっとこのへん（建築デザイン）なのかもわかりませんけど、公共性が高い、それから長寿命。長寿命だということは、例えば50年使うとすると、50年間つき合わなければいけないでしょう。例えば皆さんが住んでいる家の近くに橋ができると、その橋を50年間見て暮らさないといけない。あるいは渡って暮らさないといけない。ということはどういうことかというと、長年使っていても、長年見ていてもあきないデザインですよね。やっぱりぱっと見て、いいなと思うのはちょっとあきてくる、派手なものは。それから、みんなが使うということは、これはどういうことかというと、公共性が高いと普通言いますけど、もうちょっとわかりやすく言うと、使う人に選択権がないということです。シャツは、使う人に選択権がある。嫌いだったら買わなければいいんだから。ところが、家の近くにある橋は選択権がない。この橋を渡らなければ街に行けない、あるいは会社に行けないということになるわけですから、選択肢がないわけです。だから、公共事業というのは、もうちょっとはっきり言うと、選択権のないものをデザインして、市民に提供する。だから、あんまり自分の趣味を出すと押しつけのデザインになるわけです。これがいいですよという話になる。好きな人もいるでしょう、だけど嫌いな人もいるということになるとまずいわけです。

だから、同じデザインにしても、ファッションのデザインとかイベントのデザイン、イベントなんていうのは1日ですから、ちょっと嫌でも我慢すれば終わるので構わないです。ここの土木デザイン、特にインフラのデザインは、そういう心構えでやらないとだめだということなんで、デザインとはいっ